長谷寺かわら版
百日紅
87号
2013（平成25）年
11月1日

仏像への長い道（後編）

人はなぜ仏像を拝むようになったのかという話の後編です。

仏像たちのモデルは、仏教をひらいたお釈迦さんです。そのお釈迦さんの死後、弟子たちは、師である釈迦の教えを、忘れないよう、間違えないよう、口伝えで残してきた、という話までしていました。

☆音で伝える

話は少しそれますが、いまは文字文化全盛の時代ですから、言葉は文字にされ、文章になります。さまざまな道具や機器の発達で、文字にすること自体、いとも容易な作業になりました。情報や知識は、文字にすることで確実に伝わるし、残ります。

しかし少し前までは、文字で、文章で伝えることだけでなく、声に出して、音にして伝えることが今よりずっと多かったし、必要とされた社会だったように思います。

それに、音で聞いたものは、文字で見たことよりも忘れにくいように思います。目は覚えていなくても、耳は覚えているということは多いです。小学校で教わった島崎藤村や宮沢賢治の詩を、私はいまも暗誦（あんしょう）できます。人間の脳がそんな風にできているんでしょうか。

それに、本当に大切なことは、音を使わないと、声に出して言わないと伝わりません。学校の先生は、黒板に書いて教えますが、叱るときは黒板なんか使いません。しっかり口で目で、身体全体で伝えます。

大切なことは、文字だけでは伝わらない。先生が黒板に書いて教えることなど、本当はつまらないことばかり、なんて気もします。

☆すべてが教え

先生の話が出ましたから、ここでちょっと「教え」というものについて考えてみます。

例えば私たちは、学校の先生に勉強を教わりました。生徒は勉強を積んで知識を広め、自己を高めていくわけですが、先生を拝むと勉強がはかどり、成績があがるなんてはずはありません。この理屈でいえば、仏教の師である釈迦を拝めば悟りがひらけるなどということが、あるはずもないわけです。

しかしちょっと想像してみて下さい。もしその先生が、単なる知識を与えてくれるだけの学校の先生みたいな存在（すみません、ぼくがそんな教員だったので）でなく、これまで何も分からなかった、何も知らなかった自分に、生き方やものの見方、考え方のすべてを教え、導いてくれた存在だったとしたらどうでしょう。その先生がいなくなってしまったら、自分たちはこれからどう生きればいいか、何をすればいいのか、何に頼ればいいのか皆目わからず、きっと路頭に迷ってしまうでしょう。

釈迦と弟子や信者たちの関係は、そういうものだったのだろうと思います。

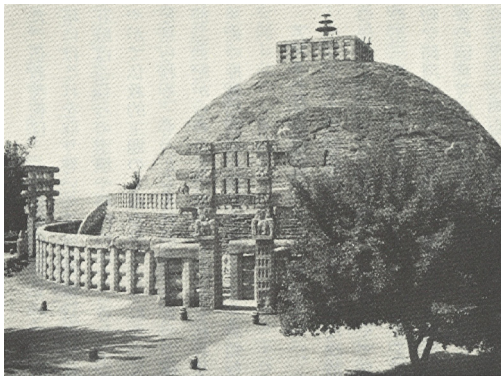
とすれば、その教えは、決して釈迦が口にした言葉、話した内容だけにとどまるものではありませんでした。所作や人との接し方、食べた物や生き方、その他もろもろ。いわば、釈迦という人間の存在そのものが、弟子や信者たちにとっては、教えに他ならなかったでしょう。そしてそういう行為、行動の源泉である釈迦の身体もまた教えなのだと考えたはずです。

これは私たちが、尊敬する人、憧れる人に少しでも近づくために、同じものを身に着けたり、同じような所作をしてみたりすることと、きっと同じことです。

☆舎利（しゃり）

釈迦が亡くなると、遺体は荼毘（だび）に付されます。火葬にされたわけです。遺骨は仏舎利（ぶっしゃり）、あるいは単に舎利（しゃり）とも呼ばれます。

誕生仏は、裸で天と地を指さしています。


インドのサーンチーにある仏塔。世界遺産です。

釈迦は、自身の説いた教えのみを師とし修行に励むよう言い残しました。しかし弟子たちにとってみれば、その身体さえも教えに他ならないわけです。であるなら、焼かれて残った遺骨もやはり釈迦の教えです。

むろん、この舎利は「教え」などという抽象的な意味だけでなく、私たちが家族の遺骨を大切に扱うのと同じように、敬愛する師の肉体そのものとしても大切にし、崇めたことでしょう。

当初は信者たちによる奪い合いがあったものの、舎利は8つに分けられ、それぞれ塔に納められたと伝えます。さらに後代には、アショカという名前の信仰の篤い王によって、再分配され、八万四千の塔が建てられ、そこに祀られたとされています。

八万四千という数はともあれ、舎利が塔に祀られたというのはたしかなことのようです。仏教において塔というのは、とりもなおさず釈迦の遺骨を祀る施設として建てられたものでした。

☆塔は釈迦の住まい

さて、焼かれて骨になっても、舎利は釈迦の生身の肉体そのものと考えられました。だとしたら、それが納められた塔はいわば釈迦の住まいですから、それにふさわしい場でなければなりません。

舎利を納めた仏塔の内部には、釈迦の生涯を描いた、いくつものレリーフ（浮彫）が刻まれました。

釈迦の生涯を描いたものを「仏伝図」といいます。白い象が母親の胎内に飛び込み釈迦を妊娠する場面。母の右脇から誕生する場面。城の4つの門から出て、老人、病人、死人、そして修行者に出会い出家を決意するという「四門出遊」の場面。菩提樹の下で悟りを得る場面。横たわる釈迦を弟子たちが取り囲む「涅槃」の場面などなど、多くのモチーフが刻まれました。

ですから、弟子や信者たちは、そこに行くと釈迦の偉大な生涯が追体験でき、その存在を具体的に感じることができたわけです。しかもそこには釈迦の身体（の名残）があるわけですから、仏塔は、釈迦の存在を実感し釈迦に会う場でした。

ただ、礼拝の対象はあくまで釈迦そのものである舎利で、そこには仏像などはありません。舎利が釈迦の身体と同じなら、その身体の形象化である仏像など必要ないわけです。

☆聖なる遺物たち

長谷寺にある仏足跡。蓮華座の上にお立ちです。

釈迦の弟子や信者たちが聖なるものと崇め、礼拝の対象にしたのは、舎利だけではありませんでした。

釈迦の用いた鉢や着けた衣、持ち歩いた杖。さらには遺体を焼いた炭やその灰。これらは物としての礼拝対象ですが、さらには釈迦が訪れた場所なども礼拝対象とされました。この、場としての礼拝の対象は、のちに聖地と呼ばれることになります。

では、なぜ釈迦の身体（舎利）以外の物や土地が礼拝の対象にされたのでしょうか。それらはいずれも、釈迦が直接手で、あるいは身体が触れたものだからでした。ですからそれらは、間接的ではあるけれど、やはり釈迦の身体と同じように考えられました。

仏足跡と呼ばれる釈迦の足跡は、いまも礼拝の対象として扱われていますね。長谷寺にもあります。これなどまさに釈迦の足が触れたものであり踏んだ地でもあったわけです。

これは、私たちが、亡くなった家族の持ち物や使ったものを形見として大切に扱ったり、ともに訪れた思い出の場所を大切に思うのとよく似ています。

ところで、仏塔に描かれた仏伝図の初期のものには、釈迦の姿はどこにも描かれていません。図では、釈迦の足跡や座った台座、あるいはその下で悟りをひらいたとされる樹木などで釈迦の存在を示しました。これは、当時そういう物がまさに釈迦その人と理解され、礼拝の対象とされていたこ

礼拝しているのは、台座と樹木です。

とを示しています。

聖なる遺物が舎利と同じように釈迦そのものなら、そこに釈迦の姿など描かれる必要はありません。

☆仏像誕生前夜

舎利を納めた施設である仏塔に描かれた仏伝図には、釈迦の姿は描かれていませんでした。仏像の誕生への第一歩は、この仏伝図の変化に始まります。

仏像は、当初は、礼拝の対象として創りだされたわけではなく、この仏伝図に釈迦の姿が描かれることからはじまります。ここでの釈迦は、拝まれるものではなく、あくまで彼の物語の主役、いわば登場人物に過ぎません。この釈迦の登場の背景には、はやくから神を形象化してきた、ギリシャ・ローマ文化の影響があるといわれています。

この仏伝図の中に姿を現した釈迦が、やがて仏伝図から飛び出し、独立して形象化されたものが仏像ということになります。

このいわば単独の仏像の誕生には、仏教内部の思想的革新が背景にあるという説や、仏教を目で見て理解しようとした民族の影響という説などがありますが、このあたりの経緯は、まだきちんと解明されているわけではありません。仏像誕生の瞬間については、いまだに謎が多いです。ともあれ、独立した仏像が生まれたのは紀元1世紀頃とされます。今から約2000年前、釈迦の死から500年は経っていました。

仏伝図に姿を現したお釈迦さん。「帝釈窟説法図」。

☆拝まれるまで

しかし仏像が、仏伝図から飛び出した釈迦の姿だからといって、仏像そのものは聖なる物というわけではありません。

なにしろ、仏像が生まれる前の礼拝対象である舎利や聖遺物は、釈迦の肉体そのものであったり、その名残を留めるもの、あるいは釈迦の身体が直接触れたものでした。これに対し仏像は、釈迦の姿に擬したものではあっても、聖遺物と違い、釈迦とは直接かかわりがありません。

ですから、仏像が生まれて100年、200年経っても、仏像の置かれない寺院は多く、寺院の中心はやはりあくまで仏塔でした。仏像が礼拝対象とされるまでには、それなりの手順と長い時間が必要でした。

ではそんな仏像が、どういうわけで拝まれるようになったのでしょうか。

☆遺物たちとの繋がり

それは仏像が、聖なる遺物たちと結びつけられたからでした。初期の仏像には、舎利や聖遺物など、釈迦に直接かかわる物が内部に納められました。信者たちは、仏像というより、その胎内に納められた遺物を礼拝したわけです。

それが時間とともに仏像そのものを拝(おが)むようになります。仏像は聖なる遺物によって、それ自体が聖なる物として扱われるようになったわけです。

これは、墓石と遺骨の関係に似ています。拝まれるのは墓の内部の遺骨のはずなのに、私たちは普段、中の遺骨はあまり意識せず、名前の刻まれた墓石を拝みます。墓石を先祖の肉体そのものと考え、水をかけたり、汚れを拭(ぬぐ)ったりします。墓地を撤去する場合でも、文字の刻まれた竿石(さおいし)だけは、特別扱いされ、懇(ねんご)ろに供養され、また保存されることもあります。墓石が、中に納めた遺骨によって、拝まれる対象にランクアップしたわけです。

また、釈迦の遺物が仏像に納められ一体化されることがなくても、舎利が納められた仏塔に仏像が置かれたこともまた、仏像に聖なる物としてのパワーを与えることになりました。仏塔に納められた舎利によって聖性を与えられたわけです。

あるいは、聖地とのかかわりをもつとされた仏像もありました。それらは、釈迦が悟りをひらいた地や、初めて説

法をした地で祀られていたものとされました。

いずれにしろ仏像は、伝統的な聖遺物への信仰を基盤とし、それらと関わりを持つことによって、次第にそれらと同じような礼拝対象と位置づけられることになったわけです。

☆仏像の広がり

そうなると、仏像は視覚的に明快に釈迦の姿を表わしていることもあり、次第に独立の礼拝対象としての地位を確かなものにしていくことになります。仏像そのものが聖なる存在と考えられ、釈迦そのものと認識されるようになります。

これがおおむね紀元後4～6世紀のことといいますから、仏像が釈迦そのものとして拝まれるまでには、釈迦が亡くなって1000年という時間が必要だったわけです。

仏教が発展し、教えが広がるとともに、釈迦は神格化され、「三十二相」と呼ばれる多くの優れた身体的特徴を持つとされるようになります。頭頂の肉が大きく盛り上がっていたり、眉間（みけん）に光る白毛が生えていたり、あるいは足の裏に不思議な装飾の輪の模様があるなどがこれです。

そしてそういう肉体的特徴が仏像に表現されることになり、これらの特徴を備えた像こそ釈迦の姿に他ならないと考えられ、信じられるようになります。そうなると、釈迦の顔などは問題にされなくなるわけです。

仏像が釈迦の姿と信じられるようになると、仏像そのものを用いた法要も発達しました。赤ん坊の釈迦の仏像に甘茶をかけて供養する花祭りは、その典型ですね。また、それまで仏塔と僧院（僧侶の住まい）のみだった寺に、仏像を祀るための施設が作られるようになります。

さらに時代が下ると、これまで寺院施設の中心であったはずの仏塔は、仏像を祀る施設の付属物のような存在になっていきます。これに対し、仏像を安置した施設は「本堂」と呼ばれ、寺の中心に位置づけられ、舎利と仏像の立場が逆転することになり、はては塔を持たない寺さえ現れますが、これはもう少し先の話になります。

修繕通信

◆平成の大修理

本堂の内陣を飾るのは天蓋（てんがい）と幢幡（どうばん）。これを飾るキラキラのデコレーションは、瓔珞（ようらく）と呼ばれるもので、膨大なパーツの集積です。

これらは、1984年の弘法大師1150年の御遠忌（ごおんき）に設（しつら）えたものですから、すでに30年が経過しました。瓔珞はおもに糸で吊られていますが、この糸が劣化してしまったのでしょう、パーツが落ちてしまう事件が頻発しました。

見かねた桑島の小林昌子さんが、この夏、この糸を全て付け替えて下さいました。膨大な時間とエネルギーを要する作業です。

修繕前と見た目は全く変わらず、地味で目立たないのですが、長谷寺史に残る偉大な仕事です。記して心から謝意を表します。

縦に長いのが幢幡、フリルの付いた傘が天蓋です。

◆お盆の合同供養

お盆には檀家さんの家に伺って、仏壇でご先祖さまの供養をしています。しかし、寺から一方的に日時を指定して訪れるわけですから、中にはどうしても都合のつかない家もあります。

そういう檀家さんのために、本堂での合同供養を始めて、今年で8年になります。この夏は、70軒を超える檀家さんが本堂に集まりました。

法要の日時は、盆経の案内葉書に記してあります。どうぞご利用ください。

◆詠歌教室

木津野の前田義秋さん・久子さんご夫妻が、詠歌教室を開きます。経験の有無は問いません。誰でも大歓迎だそうです。TEL 686 - 9427までお問い合わせください。

細かいパーツを糸でつなぐ地道な作業。